

人生は一度だけ

1年2組 安藤 かな

「後悔してもかまわない、で起こした行動は、たぶん、やっぱり後悔することになるでしょう。けれど、そんなふうにして得た後悔は、後悔しなかったことより、もしかしたらずっと素敵なことなのかもしれません。」これは筆者が本の中で述べた言葉である。私は、これから生きていく上での自分へのエールのように聞こえて、嬉しくなった。

後悔...既にしてしまったことについて、後になって悔やむこと。辞書にはこうある。私たちは後悔と聞くとあまりよい印象を持たないが、それは私たちに問題があるのであり、決して後悔すること全てが悪いとは言い切れないのではないか、と思う。例えば、自信はなくてもやるだけの事はやり、臨んでみたが失敗した時の後悔。ここで「やらなければよかった。」と後悔してしまっただけでは、あまりにも寂しい。失敗して後悔したなら、その後悔をエネルギーに変えたらどうだろう。次に臨むときまで、“心のダム”に蓄えておいたエネルギーは絶対に無駄にはならない筈である。

ならば、何故私たちは後悔という言葉にあまり良い印象を持たないのか。それはやはり、失敗することを懸念し、臨む前か諦める心を持ち合わせたとき、当然の事のようについてくる後悔。この後悔こそ、私たちが日常生活で体験する後悔の割合として高いものと言えるからであろう。つまり、失敗を恐れるが故に、やってもみないうちから断念してしまう。これではエネルギーに変えることのできる後悔は残る筈もなく、まさに「後悔先に立たず」の諺通りである。

現在、個性の時代と騒がれている中で、日本は「自分を出さない若者が増えている」と言われている事を知っているだろうか。授業においても、挙手して自分の意見を述べる、という光景を見ることが以前に比べ明らかに少なくなったという。デンマークの教員養成学校では、「英作文の間違いを赤ペンで真っ赤に直して返すやり方は、生徒の意欲を失わせるから避けるように」と指導している。確かに間違いを指摘してばかりいると、「間違わないように」「失敗しないように」と臆病に考える癖がつきやすい。「失敗を恐れず、まずはやってみよう」というチャレンジ精神が薄れてしまう。挑戦しなければ失敗することもないだろうが、創造もないということを知っておきたい。日本でも、もっと失敗に寛容な社会を創り上げることができれば、視野もグンと広がるように思う。

一度きりの人生をどう生きるか。その生き方は人それぞれであり、失敗や後悔のない人生を願う人もいるだろう。しかし、必ずしもそうでなければならぬこともないと思うのだ。むしろ、失敗や後悔のない“後悔”という壁で塗り固められた人生が存在するとしたら、それはそれでつまらないのではないだろうか。私は考えた。全ての人が平等に与えられた、たった一度の人生の中で大切なことは何だろう。

それは、「自分らしく生きる」ということ。失敗するより、成功するに越したことはない

が、物事をする度に成功・失敗の結果を考えていては、開ける道も開かない。大切なのは、自分の信念を持ち、自分らしさを持って生きることではないだろうか。誰のものでもない、自分の人生なのだから。

『人生は一度だけ』自分自身の経験や、身の周りの人が体験した出来事を聞いて感じた筆者の素直な思いが、この一冊の本にぎっしりと詰まっている。「人生とはこういうものだ」「人生とはこうあるべきだ」という堅苦しいようなことは一切書かれておらず、何故か読み手を励まし、元気付けてくれる作品だ。

人生は一度だけ。どんな人生観を持って生きるのか、人によって異なるのは当然のことだ。私は、何らかのこだわりを持って生きたい。そして自分の気持ちに素直に生きたい。それこそが、「自分らしく」生きるための、最大の鍵となるのではないだろうか。